

ボランティア

東日本大震災の発生をうけ 「こころのケア」を考えるフォーラムを開催

ユニバーサル財団は毎年、全国の心のケアに取り組むボランティアを対象に、米国ミシガン大学ヘルスシステムと提携して、「ボランティア・ミシガン研修（2007年～）」を開催してきました。2011年は東日本大震災が発生したことから、本研修に代えて、心のケアに取り組む多くのボランティアを支援することにしました。過去の研修参加者の所属団体と共催して宮城県仙台市と北海道函館市、さらに「第20回全国ボランティアフェスティバル TOKYO」（都内）の分科会で「こころのケア」を考えるフォーラムを開催しました。



「第20回全国ボランティアフェスティバル TOKYO」でのフォーラム（会場・青山学院大学）には約300人が参加

Contents

ボランティア

- 全国ボランティアフェスティバル --- 2
- ボランティアミシガン研修
 仙台企画 --- 6
 函館企画 --- 7

国際交流

- “日韓こころの交流”プログラム --- 8
 “日韓こころの交流”シンポジウム --- 8
 専門職育成・国際交流セミナー --- 10
- ハワイ・ソーシャルワーク・セミナー --- 11

助成

- 研究助成 --- 14
- 特定活動助成
 「東日本大震災支援プログラム」 --- 16

全国の傾聴ボランティアとゆるやかな連携へ

当財団では、福祉研究者の国際交流事業の一環として実施した『ミシガン大学老年学夏期セミナー（1992年～2000年開催）』以来、継続して心を支えるボランティアの交流・育成に取り組んでまいりました。1995年に発生した阪神・淡路大震災を機に、主に仮設住宅に住む独居高齢者を精神面から支える目的で、「ユニバーサルボランティア」を結成。現在も復興住宅で友愛訪問を継続しております。2000年の三宅島噴火災害、2004年の新潟県中越地震でも組織を立ち上げて心のケアの一助になる活動を目指してまいりました。

東日本大震災では被害が広範囲にわたり、心のケアの重要性は高まっています。ユニバーサルボランティアと同じように心のケアに取り組む傾聴ボランティアの支援と緩やかなネットワークの形成を目指しフォーラムを開催しました。日米で心のケア・ボランティアの立ち上げと育成に取り組んできた専門家の講演、心のケアに取り組むボランティアによる事例発表など有意義な内容となりました。

こころのケア・ボランティアへの誘い

当財団では、2011年11月12・13日に開催された日本最大規模のボランティア・市民活動イベント「第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO」の分科会でフォーラムを13日に開催しました。テーマは「こころのケア・ボランティアへの誘い」。日米から社会福祉・臨床心理分野の専門家を招き、ボランティアが行う「こころのケア」の意義を解説。また、ユニバーサルボランティアをはじめ、全国のボランティア団体が、事例を通して「傾聴」の大切さを訴えました。

開会挨拶 (抜粋)



伊藤 勲氏
理事長

真心を形に現して

貢献活動を継続

東日本大震災では、これまでのボランティア活動の経験が生かされると共に、国内のみならず世界各国からお見舞いや連帯のメッセージなど、新たな形での支援の手が差し伸べられ、やがて、被災地の方々を支援するためにチャリティー活動やセミナーなどが開催されるようになりました。

こうして、多くの方が「絆」を求め、精神的な復興をも求めていることを知り、人間の心の温かさ、優しさをしみじみ感じさせていただきました。

本分科会では、「地域における市民のつながり」というテーマで、「こころのケア」「傾聴ボランティ

ア」を紹介させていただきます。今、地域で孤立しがちな高齢者の話に真摯に耳を傾け、自立を見守るボランティアに期待が向けられております。ことに災害を通し、被災者となった方々に寄り添って心の奥からこぼれてくる思いを受け止めるボランティアは、大変重要なサポート役になります。

私たちは誰もが多くの人の支えによって生かされていると共に、他に勇気や希望を与えることもできます。災害時だけでなく平時にあっても、いつまでも、長く、人の持つ真心を形に現して、貢献活動を継続していただきたいと切に願っております。

導入 (抜粋)

高齢者に寄り添って 心の声を聴く



白倉 嘉男氏
ユニバーサルボランティア東京代表

ーユニバーサルボランティア東京の活動ー

三宅島噴火災害により避難されてきた高齢被災者支援活動からスタート。武蔵村山団地三宅島会高齢被災者への友愛訪問とふれあいセンターでのサポート活動でした。現在は、地域包括支援センターなどのご紹介

で高齢者宅への友愛訪問（立川市とその周辺）、立川市健康体操教室での話し相手、武蔵村山市高齢者在宅サービスセンターでのサポート活動を行っています。

私たちは「ユニバーサルボランティア心得7カ条」を常に心がけています。①相手の立場に立って活動

しましょう。②秘密を守りましょう。③約束を守りましょう。④情報の収集と提供に心がけましょう。⑤関係者とよく連携しましょう。⑥自分が専門家でないと感じましょう。⑦息の長いボランティア活動を目指しましょう。

－ユニバーサルボランティアが目指す「こころのケア」－
「高齢者に寄り添って心の声を聴き、そばに居続けて自立を見守ること」です。

友愛訪問は、ボランティア2人1組が月に1回、高齢者宅を1時間程度、訪問します。このわずかな時間に高齢者ご自身の自由な意思で、思うがまま、ゆっくりお話される「貴重な心の時間」に、ただ居続ける、寄り添えることが、何よりも大切だと思っています。黙って耳を傾け、頷き、共感し、温かく存在することに徹しています。

－活動の手順と報告－

立川市では高齢福祉課の主催で、市内全域の地域包括支援センターと主力病院、保健所、あんしんセンターが参加する「地域ケア会議」が毎月開催されます。6年前からその会議で活動説明をして、高齢者をご紹介くださるようお願いしてきました。市内全域での「小地域ケア会議」(隔月)にも参加して、ケアマネジャー・関係者とボランティアが信頼関係をつくり、各ケアマネジャーから、話し相手が必要と思う高齢者をご紹介いただいています。

ご紹介にあたっては「友愛訪問シート」に記入いただき、高齢者の状況を確認した上で、ケアマネジャーと高齢者宅で、ご本人、場合によりご家族も一緒に、三者で打ち合わせをし、訪問日を決定してスタートします。ケアマネジャーには、プライバシーを守りながら、訪問した時の状況を報告します。

講演 (抜粋)



ルース・キャンベル 氏
ミシガン大学附属ターナークリニック
元ソーシャルワーク部長

ボランティア活動は

自分が与えた以上を得る

心のケア・ボランティアの活動には、話し相手になる傾聴や回想法、オーラルヒストリー(関係者から体験を聞き、記録としてまとめること)、またレスパイトケアもあります。これは認知症の方とボランティアと一緒に過ごし、介護者・家族には休息をとってもらおうという支援です。ただ一緒に座って過ごす、散歩やいろいろな活動を一緒にする、また、一緒に食事をしたり体を動かしたり、音楽を聴いたり歌ったりすることによって、クライアントの方は気持ちが落ち着き楽しい経験になります。重要なのは、クライアントのペースに合わせるということです。その人の関心に合わせる事が重要です。

ボランティア活動は、地域社会や、それを必要としている方にとって大きな利益をもたらすだけでなく、ボランティアをする側にとっても得るものは大きいものです。

ボランティア活動の利点として、①人生に意味を与えます。私たちは年齢を重ねていく中で、人生の意味をよく考えるようになります。誰もがそれを見出したいと思いますが、ボランティア活動の中で見出すことができます。②生活に枠組みをもたらします。例えば朝10時にどこかに行って待ち合わせをして、予約をするなど、生活が計画に基づいたものになります。③友達を増やせます。例えば年を重ねるごとに友人が別の場所に移ったり、亡くなったり、友達の数は少なくなっていくものですが、ボランティア活動のネットワークでは、友人を増やすことができます。④知らなかったスキルを学べます。つまり、成長でき、年を重ねながら学び続けることができます。⑤ボランティア活動は自分が与えた以上のものを得ているのだと自分に考えさせてくれます。⑥地域社会に貢献できます。

講演 (抜粋)



黒川 由紀子氏

上智大学総合人間科学部教授

高齢者は①多様多様であり、「高齢者とは〇〇である」と言えない。この基本を忘れたくないと思います。②とうてい私たちに語りきれないくらいさまざまな経験を積んでいる。③多くの喪失体験もある。自分の両親や配偶者だったり、あるいは健康を失っていく。住み慣れた住まいが無くなったり、そこに住めなくなってしまうこともあるでしょう。④年配の方は、数多の喪失体験を乗り越えてきたすごい強さも内に秘めている。そこをどう尊重・尊敬し、そういう力が出るのを阻んでいるとしたらその障害を取り除くという感覚が大事ではないでしょうか。⑤人生早期の葛藤が現れることがある。お話を聴いている時に、子ども時代の話や、とっくに亡くなった方の話が出ることもあると思います。でもそれは意味

講演 (抜粋)



フォーク阿部まり子氏

ミシガン大学ヘルスシステム
臨床ソーシャルワーカー

ストレスの一つに喪失があります。東日本大震災の被災者の方々は、いろいろな喪失体験をされています。日常的なことが、もしかしたら無くなるかもしれないという安全性の喪失を、たぶん日本中の皆さんが体験されたのではないかと考えています。日常的なものは、リタイヤの場合は、社会的位置付け・役割の喪失などがあります。障害や病気、加齢により、できたものができなくなるという喪失や、さらに、人生の変化も喪失体験にもなります。変化は得るものもありますが、失うものも多いからです。

次の9つのうち5つ以上が2週間以上続くと、精神疾患診断マニュアル(DSN)では重いうつ病と診断をされます。①空虚感、悲しさや不安が尾を引い

高齢者は明日に

向かって生きている

があります。歳をとっても、人生の早い段階のトラブルや心の傷がもう一度現れることがあるので、そういう話は丁寧に何うのが大事ではないかと思えます。⑥孫など、次の世代とのつながりの感覚。年配の方は自分自身の孫はもちろんのこと、それ以外の孫世代とのつながりが大事と思っている方が多いようです。⑦過去を回想しているばかりではなくて明日に向かって生きている。このことを絶対に忘れたくないと思います。⑧年配の方はいろいろな役割から開放されて、新しい可能性を持っておられる。⑨死者との対話が支えとなることもある。訪問する時に、亡くなったご主人様のお写真が飾られてあったり、仏壇にお位牌があつたりするのは、亡くなった人と自分との絆です。それを大事にされている方も非常に多いです。

東日本大震災によって

日本中が喪失を体験

て続く。イライラ。②疲労感、活力がない。体の節々の痛みが取れない。③日常生活上の活動への興味、関心、喜びを失う。④不眠または睡眠過多。⑤食欲不振または食欲過多、体重の変化。⑥精神運動性の焦燥または鈍くなる。⑦集中、記憶、決断するのが困難。⑧罪悪感、無力感。「自分はだめな、価値のない人間」と思う。⑨死、自殺を考える。将来の見通しが暗く感じられる。

5つ以上に該当しない方の場合には軽いうつ病と診断されます。うつ病は「きっと立ち直ってくれる」という願い通りに、いかない場合があります。必ずしも人格が弱いとか、未熟だからではなく、私たち誰しもなりうるということも知っておく必要があります。

事例発表 (抜粋)

傾聴の必要性を被災地から発信

森山 英子氏 仙台傾聴の会代表

東日本大震災の被災地から活動の報告をします。傾聴ボランティアの必要性が大きくなっています。

当会では、悩みや不安を抱えている人の相談を受け場として、「傾聴の広場」を開催しています。この広場で話をして心の整理がついたり、悩みに気づけたなど、来られた方から「思い切って話しに来てよかった」という声がたくさん聞かれるようになりました。

被災地では仮設住宅の集会所でお茶会を開きながら傾聴活動をしています。6月から10月までで、仙台市、名取市、岩沼市で70回開催しています。ボランティア派遣は、延べ350人で、利用された方は延べ1,120人になります。仮設での生活の様子、震災からの自分の心の変化などを話されて、少しずつ現状を受け入れつつあるように思います。

全国の傾聴ボランティアと連携

菊池 美保子氏 NPO法人傾聴ネットキーステーション代表

ユニバーサル財団主催の「ボランティア・ミシガン研修」に参加した仲間と語り合い、遠隔傾聴の必要性に辿り着きました。遠隔傾聴とは、遠くに住む身内や知人の元へ、その地域の傾聴ボランティア団体の支援を依頼し、代わって会いに行ってもらい現状を報告しあうという活動です。

ひとつ事例を紹介します。90歳の母親を残して転勤した息子さんです。その息子さんは、月に10日間会社から介護休暇をとって母親の元に帰って来られていました。母親は、傾聴ボランティアや、その

東京から電話で被災者の声を聴く

武藤 圭子氏 NPO法人KeiCho ネット理事長

東日本大震災以降に東京で、岩手、宮城、福島からのフリーダイヤル電話相談にかかりました。被災後3ヶ月は、お電話をかけて下さっただけで感謝でした。皆さまご遺体が見つからないという方ばかりで、私は「聴く」というより、電話を通して傍にいらしていただく以外ありませんでした。その方の悲しみのほんの僅かでも、ご一緒にできればという気持ちで、電話を取っていました。3ヶ月を過ぎると、



仙台傾聴の会代表・森山英子氏【左】
NPO法人傾聴ネットキーステーション代表・菊池美保子氏【中】
NPO法人KeiCho ネット理事長・武藤圭子氏【右】

避難所での傾聴が中日新聞に掲載され、その記事の内容を地元の中学の授業で取り上げてくれました。中学生の感想に「悲しみを背負っている人は誰かに話すことで不安や悲しみを少しでも和らげられると思う。だから人と人のかかわり合いは大切なことなんじゃないかなと私は思う」と。当会の活動が授業に活かされたことで励みになりました。

町村から福祉関係の方が訪ねても、「お上にお世話になるのは恥」と言っていて、なかなか公の補助を受けられない、介護を受けられない状態でした。高齢者になると、お上のお世話になるのは恥ずかしいという気持ちがあるのではないかと思います。

そこで、息子さんの友達ということにして傾聴ボランティアが伺いました。母親が段々と傾聴ボランティアに慣れてくることによって、息子さんの10日の休暇も半分になり、会社への気遣いがなくなつたという報告を受けました。遠隔傾聴での支援の重要性に改めて気づかされました。

被災された方々は、非日常の生活から少し日常の生活に戻られ、お話の内容が「自分だけ生き残ってしまった」罪悪感と、「これからの生活」への不安が出てまいりました。月命日には一年間お声を聴かせていただきました。(この後現地での組織化により終了しました。) 私たちの会員の中には、それぞれの地域から、現地に傾聴ボランティアとして心のケアのお手伝いに行っている方も多いです。

ポスターセッション

フォーラム終了後に、「ボランティア・ミシガン研修」参加者が所属する10団体のポスターを展示して交流する「ポスターセッション」を行いました。ポスターには写真やイラストを交えて活動内容が説明されており、全国のボランティア同士が交流を深めました。

ポスターセッション参加団体

- ①桑名傾聴ボランティア・みみずく
- ②NPO法人Kei Cho ネット
- ③NPO法人傾聴ネットキーステーション三重
- ④傾聴ボランティアせと
- ⑤傾聴ボランティア益城
- ⑥一般社団法人市民介護相談員なは
- ⑦仙台傾聴の会
- ⑧富山傾聴ボランティア・ピアの会
- ⑨北海道メンタル評議会
- ⑩ユニバールボランティア



フォーラム終了後のポスターセッション

● ボランティア・ミシガン研修

仙台企画「こころのケアを考えるフォーラム」

災害時のこころのケア・ 傾聴ボランティア

「ボランティア・ミシガン研修」参加者の所属団体で、東日本大震災の被災者のこころのケアに取り組む「仙台傾聴の会」と共催して7月10日にフォーラムを開催しました。東北大学片平さくらホール（仙台市）の会場には、ボランティアを始め専門家、新聞記者など定員を超える約230人が来場。日米の高齢者ケアに精通する講師による基調講演、臨床心理分野の研究者・専門家などによるパネルディスカッションを通して、こころのケア・ボランティアの役割を深めました。



東北大学片平さくらホール（仙台市）でフォーラムを開催

基調講演（概略）

災害後の傾聴ボランティア活動を高く評価

ルース・キャンベル氏が「米国から学ぶボランティアについて」をテーマにミシガン大学附属ターナークリニックで患者と同じ高齢者が活躍するピア・ボランティアを組織した経緯などを紹介。さらに、災害ボランティアについて、カウンセリングのスキルなど具体的に解説されました。災害後の傾聴の果たす役割を挙げ、「日本で力強く育っているボランティア精神を、高く評価してほしい」とまとめられました。

パネルディスカッション（概略）

災害時のこころのケアを討議

フォーク阿部まり子氏が「災害と私たちの心と体」、黒川由紀子氏が「災害時に必要な心のケア」、高橋由里氏が「震災後の心のケアの活動」について、それぞれ講演されました。

フォーク氏は、喪失体験ではどのような反応でも、辛い異常な事態への正常な反応だと説明。喪失について、①人間が弱いから起こるのではない、②同じ状況でも人によって悲嘆の現れ方は異なるので他人と

比べない、③うつ病やPTSD（心的外傷後ストレス障害）は専門家に相談することと解説されました。

黒川氏は、福島県の避難所での子どもたちの遊び方を目の当たりにして、被災者は様々な形で震災の体験を健康的に消化しようとしていることを説明。また、傾聴ボランティアの存在の心強さと、長期的な支援が求められていることをお話しされました。

高橋氏は、仙台市での心のケアチームの活動を①震災直後、②震災後1ヶ月から3ヶ月、③今後の活動についてお話しされました。長い避難所生活の中で生活弱者の問題や家族間の問題が顕在化することがみられたと説明。仮設住宅に移った後はアルコール依存の問題が浮き彫りになるのではないかと指摘されました。

- 日 程：2011年7月10日（日）
- 会 場：仙台市「東北大学片平さくらホール」
- テーマ：災害時のこころのケア 傾聴ボランティア
- 共 催：仙台傾聴の会 財団法人ユニバーサル財団
- 協 賛：エーザイ株式会社 花王株式会社
グラクソ・スミスクライン株式会社
- 後 援：仙台市 岩沼市
社会福祉法人宮城県社会福祉協議会
社会福祉法人仙台市社会福祉協議会
社会福祉法人岩沼市社会福祉協議会
宮城県医師会 仙台市医師会
せんだい・みやぎNPOセンター
宮城県国際交流協会 東北大学
東北福祉大学 東北工業大学 河北新報社
毎日新聞仙台支局 読売新聞東北総局
NHK仙台放送局 TBC東北放送
仙台放送 ミヤギテレビ KHB東日本放送

- プログラム：
- 〔開会〕
森山 英子（仙台傾聴の会代表）
財団法人ユニバーサル財団
- 〔基調講演〕『米国から学ぶボランティアについて』
ルース・キャンベル
- 〔活動紹介〕 仙台傾聴の会
- 〔パネルディスカッション〕
・事例発表
フォーク阿部まり子
黒川由紀子
高橋 由里（仙台市精神保健福祉総合センター・臨床心理士）
・進行
真壁さおり（仙台市シニア活動支援センター長）
- 〔まとめ〕 黒川由紀子 〔敬称略〕

函館企画「ミシガン研修イン函館」

「アメリカにおける高齢者ケア・望まれるケアとは」をテーマに「ボランティア・ミシガン研修」参加者の所属団体「北海道メンタル評議会」と共催して7月12日にフォーラムを開催しました。会場（ホテル法華クラブ函館）には、ボランティアなど約160人が参加。基調講演・パネルディスカッションを通じて、高齢者のこころを支えていくケアの意義について様々な反響がありました。



函館市で開催したフォーラム

- 日 程：2011年7月12日（火）
- 会 場：函館市「ホテル法華クラブ函館」
- テーマ：アメリカにおける高齢者ケア
望まれるケアとは
- 共 催：北海道メンタル評議会
財団法人ユニバーサル財団
- 後 援：函館市
函館市教育委員会
函館市社会福祉協議会
函館市地域包括支援センター連絡協議会
北海道医療ソーシャルワーカー協会南支部
北海道新聞函館支社
函館新聞社
函館山ロープウェイ
(株)FMいるか

- プログラム：
- 〔開会〕
弘田 義江（北海道メンタル評議会理事長）
- 〔基調講演〕『アメリカにおける高齢者ケア』
ルース・キャンベル
- 〔パネルディスカッション〕『望まれるケアとは』
・メインパネリスト
フォーク阿部まり子
・パネリスト
北村 和宏（特定医療法人社団高橋病院看護部長）
三谷 真理（函館市地域包括支援センターこんセンター長）
湯浅 弥（特定非営利活動法人小呂野理事長）
・コーディネーター
弘田 義江 〔敬称略〕

日韓こころの交流プログラム

シンポジウム、専門職育成・国際交流セミナー 「家族支援とソーシャルワーク」をテーマに開催

ユニベール財団では、少子高齢社会に直面する日本と韓国の若い福祉人材の育成を目指し、「日韓こころの交流」シンポジウム」及び「専門職育成・国際交流セミナー」を開催してまいりました。2011年は『家族支援とソーシャルワーク～家族のための地域社会機能の強化』をテーマに崇實（スンシル）大学校ベアードホール（韓国ソウル市）で第9回シンポジウムを開催（2011年11月26日）。併せて、日本の大学院生及びソーシャルワーカー6人を派遣し、第4回「専門職育成・国際交流セミナー」（11月20～27日）を実施しました。



崇實（スンシル）大学校ベアードホールで開催

● 第9回 “日韓こころの交流” シンポジウム

開会挨拶（抜粋）



伊藤 勲氏
理事長

地域の方々が支え合う 社会機能をつくるために

日本では、世界に先がけて少子高齢化が急速に進み、人口減少社会の到来が明らかになってまいりました。

今日、子どもから高齢者まで、地域社会が抱える様々な問題に対して使命感を持って挑み、積極的に行動するには、優秀な人材の育成が急務となっております。

人を育てていくということは、知識や技術の修得もさることながら、他人を思いやる“こころ”やその行い、また、家族、友人、先輩、恩師など自分の周囲の人からいただくまごころ、まことを、尊く感謝で受けとめる“こころ”を培っていくことが大切であります。さらに、その“こころ”で、地域の方々

が一つになって支え合っていく社会機能を作ることこそ、問題解決への重要な道であろうと考えます。

こうした観点をふまえ、当プログラムは、シンポジウムだけでなく社会福祉を学ぶ大学院生と若手ソーシャルワーカーが、共に学び、交流する「韓日こころの交流プログラム」も併行して進めております。

「韓日こころの交流プログラム」は、まだ小さな取り組みですが、今後も開催の営みを重ね、文化、習慣、言語、人種、宗教、国境を越え、あらゆる人と人との関係に友愛の橋を架けて、融和世界を構築してまいりたいと思います。

基調講演 (概略)

日韓両国から家族支援政策・実践を論究

日本側から大橋謙策氏がジェネラルソーシャルワークの必要性を主張。縦割りの社会福祉制度の問題点を指摘し、保健・医療・福祉が連携したケア・マネジメントと、多問題を抱える家族に対してワンストップで福祉サービスを提供できるシステムの確立を提言されました。

韓国側は文昌珍氏が、家族支援政策の問題点として、①家族支援政策が韓国政府の女性家族部、保健福祉部、教育科学技術部の各部に分散。②予算の規模が少ない。③第一線現場での家族サービス供給体系が不十分。④地域間でのサービス格差が発生していることを挙げられました。これらに対して、韓国政府部署間の政策調整会議の設置、政府と民間のパートナーシップの強化、国庫補助事業及び交付金制度の改善、社会福祉公務員の拡大配置などを訴えました。

事例発表 / パネルディスカッション (概略)

公民協働でおこなう地域福祉システムを議論

韓国側からは沈奵植氏が、太和基督教社会福祉館での「地域知り体験学習プログラム」の事例を紹介。同プログラムは、江南教育庁と連携しながら、父兄ボランティアを組織し、小学3年生を対象に行った事業で、学校・地域とのネットワークを通じて、児童への支援から家族全体へと効果を波及させるプランを提示しました。宋香燮氏はソウル市健康家庭支



パネルディスカッション

援センターの役割と家族支援にあたっての予防的、普遍的、統合的なアプローチを主張されました。

日本側からは、森田圭子氏が、「子育てサロン」を民間で最初にボランティアとして始め、市の事業に格上げされた実践と、ホームスタートと呼ばれる未就学児がいる家庭に研修を受けたボランティアが訪問する「家庭訪問型子育て支援」の事例を発表。矢崎和広氏は、茅野市長在職時に、市民参加のもとにプラン策定から提言・実践までを行った「福祉21 ビーナズプラン（茅野市地域福祉計画）」における保健・医療・福祉の連携一体化の事例を提示。まとめに大橋氏は、茅野市保健福祉サービスセンターの職員が年間280日間地域に出ていることを引き合いに、アウトリーチ（訪問支援）型のニーズキャッチ（福祉課題の発見）の重要性を指摘。さらに、社会起業的なサービス開発を取り入れながらソーシャルワーク実践を行う必要性を提言されました。

●日程：2011年11月26日（土）

●会場：韓国ソウル市 崇實（スンシル）大学校
ベアードホール

●テーマ：「家族支援とソーシャルワーク
～家族のための地域社会機能の強化」

●主催：第9回“日韓こころの交流”シンポジウム
実行委員会
財団法人ユニベール財団

●共催：崇實大学校 韓国社会福祉士協会
韓国社会福祉教育協議会
社団法人日本社会福祉教育学校連盟
ソーシャルケアサービス従事者研究協議会
社会福祉法人こころの家族
韓国社会福祉法人崇實共生福祉財団

●後援：韓国社会福祉学会 韓国社会福祉協議会
一般社団法人日本社会福祉学会
社団法人日本社会福祉士会

●プログラム：

〔開会辞〕 柳 秀鉉 崇實大学校社会福祉大学院院長

〔主催者挨拶〕 伊藤 勲 財団法人ユニベール財団理事長

〔祝辞〕 林 采民 韓国保健福祉部長官

金 大根 崇實大学校総長

車 興奉 韓国社会福祉協議会会長

〔基調講演〕 文 昌珍 CHA 医科学大学校保健福祉大学院院長

大橋謙策 日本社会事業大学大学院特任教授

〔事例発表 / パネルディスカッション〕

コーディネーター 柳 秀鉉 崇實大学校社会福祉大学院院長

大橋謙策 日本社会事業大学大学院特任教授

事例発表 宋 香燮 ソウル市健康家庭支援センターセンター長

森田圭子 埼玉県和光市教育委員会委員長 /

NPO 法人わこう子育てネットワーク代表理事

沈 奵植 太和基督教社会福祉館館長

矢崎和広 長野県教育委員会委員長 / 元長野県茅野市長

〔閉会コメント〕 田内 基 社会福祉法人こころの家族理事長

(敬称略)

国際感覚を身に付けた 若手福祉研究者を育成

当プログラムは次代を担う福祉専門職の育成を目指すもので、日本と韓国で交互に開催し、今回は日本の大学院生及び若手ソーシャルワーカー6人が韓国を訪問しました。(2011年11月20～27日)カリキュラムはシンポジウムへの参加、ソウル市近郊の高齢・児童・障害など各分野の福祉機関7ヶ所の視察や、ソウル大学校と崇實大学校の大学院授業出席などで、講義や現場のワーカー、大学院生との交流・意見交換を通して、韓国の社会福祉の現状の理解を深めました。



崇實大学校社会福祉大学院の授業に参加

参加者の声



「家族・家庭を包括する視点」の大切さ

田中 悠美子氏

日本社会事業大学大学院
社会福祉学研究科

かねてから関心の強かった韓国の社会福祉。このプログラムに参加することが出来て、大変光栄に思っております。多くの皆様のご支援を賜り、非常に有意義で貴重な体験をさせていただきました。いくつか感じたことを書かせていただきます。

プログラムでは、福祉館や老人ホームなど7カ所のフィールド訪問、ソウル大学、崇實(スンシル)大学での講義に参加させていただきました。特に印象に残っているのは、「ソウル市健康家庭支援センター」です。そこは、健康家庭基本法という法律に基づいて事業が展開されており、25区の自治体を統括し、離婚した夫婦や子供に対して、DV被害を受けた方など家庭内で問題を抱えたときに家庭支援を実施しています。特に「多文化家族支援」というキーワードが印象に残りました。韓国には4万世帯も国際結婚をされた方がいて、中には言葉や文化などの違いから様々な課題を抱えている一面もあるそうです。日本にも同じくらい国際結婚の世帯はあるかと思いますが、韓国での認識の高さや支援プログラムの多様性を伺って日韓の違いを感じました。

プログラム

- 【第1日】 授業『ソウル大学校大学院』
視察『サダン総合福祉館』
視察『ソウル市女性家族財団』
- 【第2日】 視察『ソウル市健康家庭支援センター』
視察『社会福祉法人恩平天使園』
- 【第3日】 視察『漢南職業専門学校』
『中間総括』
視察『太和基督教社会福祉館』
- 【第4日】 授業『崇實大学校大学院』
視察『ソウル市立西部老人専門療養センター』
- 【第5日】 『最終総括』
“日韓こころの交流”シンポジウム

また、「健康家庭士」という専門職がコーディネーター機能を発揮して家族支援を行っているという伺いました。子どもや障害者など個別支援の制度が確立している日本では「健康家族」という概念もしかり、家族・家庭を包括して支援を行うということは、重要な課題であると感じました。シンポジウムでも家族支援について韓国と日本のお話があり、具体的な事例からアジア型のソーシャルワークの実践理論を構築していくこともこれからの課題であると感じています。自国を離れて韓国の様々な人と出会い、現場を拝見し、多くの研究課題を見つけることができました。

今後も交流を深め、つながりを大切にしていきたいと考えております。ありがとうございました。

ハワイ・ソーシャルワーク・セミナー

第9回目のセミナーを実施 多文化社会のハワイ独自のプログラムを体験

第9回目のセミナーを2012年2月13日（月）～3月4日（日）3週間にわたって開催しました。多文化環境での福祉の研究・実践で評価を得ているハワイ大学マイロンB. トンプソン（MBT）ソーシャルワーク学部と提携し、全国から公募・選定したソーシャルワーカーをめざす大学院生・大学生16人をハワイに派遣。現地での講義・現場見学・交流を通して、「アロハ精神」を基に実践されているハワイのソーシャルワークを学びました。



ハワイ大学 MBT ソーシャルワーク学部でのレクチャー

日本では経験できない多様性を学ぶカリキュラム

セミナーではハワイ大学 MBT ソーシャルワーク学部の講師陣によるレクチャー、ディスカッション、小グループでのエクササイズや施設・病院などの視察を通して多民族社会であるハワイのソーシャルワークを学びます。講義中心の日本の授業では経験できないカリキュラムがこのセミナーの魅力です。

今回の講義では、新たに「日本・ハワイ・韓国の高齢社会」という講義が加わり、国際比較の視点が盛り込まれました。過去に韓国からの留学生が参加し、国によっても考え方や価値観が違うことを通して、多様性を学び合いました。今後は日本からの参加者だけでなく、フィリピンなどからも参加できるように準備を進めています。国境・言語・文化などを超えて多くの



アメリカ赤十字社を見学

人々を受け入れてきたアロハ精神あふれるハワイでソーシャルワークを学び、人を支援するにあたり大切な心を、体験を通して養っていきます。

自分自身を表すポートフォリオの作成

セミナー期間中、参加者は自身の体験と記録をポートフォリオ（バインダー）にまとめていきます。各自がテーマを設定することによって、講義や施設見学のときに、自分の知りたいことを整理して質問につなげることができます。

セミナー運営委員のロナルド・マタヨシ氏（同学部国際プログラム・ディレクター）は「ポートフォリオは、このセミナーで何を学んだか、そして何を日本に持ち帰りたいかを考え、自分で決めて作り上げるものです。これが自分自身だと思って、自分にとって大切と思うものをファイルしていきます。」と教えられます。参加者は、3週間すべての物事にアンテナを立てながら、自分自身を表すポートフォリオの作成に取りかかります。

最終日には「結果がすべてだと思っていて、それが自分を苦しめていたことに気づきました。プロセスが大事だと教わり、本当にそうだと思えました。」という感想が寄せられています。心を開き自分自身を知るということを参加された多くの方が体験されています。

セミナーの紹介



ロナルド・マタヨシ 氏
セミナー運営委員
ハワイ大学MBTソーシャルワーク学部
国際プログラム・ディレクター

ポートフォリオは学生そのものを表し

将来を見つめるツール

ハワイ・ソーシャルワーク・セミナーは、日本社会に思いやりや調和をもたらす将来のリーダーの育成に専念しています。この3週間に及ぶセミナーを通して、学生たちは、将来の指針となるワークショップや施設機関などで日々の学習を応用して、広範囲にわたる今日的な課題に取り組みました。

セミナーでのワークショップや現場での体験を分析し、メンターと話し合いました。メンターは、日本語と英語が話せるハワイ大学ソーシャルワーク学部の学生や卒業生たちです。さらに、学生たちには各自のポートフォリオやチームごとのポスターボードによるプレゼンテーションをすることで、学ん

だことや達成したこと、また自分の実践分野のリーダーとして日本に何を持ち帰れるのかをよく考えさせます。

ポートフォリオを作るプロセスは、このセミナーの基本的なツールです。どのポートフォリオも、その持ち主である学生そのものを表しています。それは、創造的で、個性的な、自分にとって意味を持つやり方で、自分らしく表現するものです。それぞれのポートフォリオは学生自身と彼らを取り巻く環境——ハワイでのいろいろな経験、メンター、講師陣、出会った一般の人々や出会った状況——の相互作用を積み上げた最高のものとして最後の修了式で紹介されます。

同時に、ポートフォリオは、学生たちに自分の将来を見つめさせます。彼らは、ハワイで得た体験をどのように仕事や私生活に応用するのでしょうか？

ハワイ・ソーシャルワーク・セミナーでの経験のすべては、アロハという概念が生涯重要であること、またアロハ精神は一人ひとりの心の中に生きているということ、どの学生たちにも真実として語りかけます。

プログラム

【第1週】

- 2.15(月) 東京発/ホノルル着、オリエンテーション
- 16(火) 講義『ポートフォリオについて』
講義『スカベンジャー・フォト・ハント』
- 17(水) 講義『現代アメリカのソーシャルワーク』
講義『社会福祉制度』
- 18(木) 見学『州議会と社会政策』
講義『ソーシャルワーカーとアドボカシー』
- 19(金) 講義『自己の理解』
見学『アロハ・ナーシング・リハブ・センター』
- 20(土) 見学『ワイキキ・ヘルス・センター』

【第2週】

- 22(月) 講義『老年学』
見学『コミュニティーズ・イン・スクール』
- 23(火) 講義『障害をもつ人』
見学『シュライナーズ小児病院』
- 24(水) 見学『カアラ・ファーム』
講義『ハワイ・ソーシャルワークの先駆者』
- 25(木) 講義『ケース・マネジメント』
見学『フォスター・ファミリー・プログラム』
- 26(金) 講義『保健におけるソーシャルワークの実践』
見学『カピオラニ・メディカル・センター』
- 27(土) 講義『コーチング』

【第3週】

- 講義『ハワイにおける虐待』
- 3.1(月) 講義『緩和ケア』
講義『ポートフォリオ・ワークショップ①』
- 2(火) 講義『ハワイ・ソーシャルワークの
インスピレーション・リーダー』
講義『ポートフォリオ・ワークショップ②』
- 3(水) 講義『メンターセッションのまとめ』
講義『ポートフォリオのまとめ』
- 4(木) 小グループでの振り返り・報告会
ポスターセッション
- 5(金) 修了式

参加者の声



平井 康仁氏
筑波大学大学院
人間総合科学研究科

今までの思考を大きく 変えてくれる3週間

非常に充実した三週間でした。このような貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。私は現在、精神科医・産業医としてのトレーニングを積んでいるところです。

実際にセミナーに参加し、最も強く感じたことはSW（ソーシャルワーカー）に対する自分の知識のなさでした。仕事柄、PSW（精神科ソーシャルワーカー）の方とお会いする機会が多かったので、PSWの方に対する理解のままセミナーに参加しておりました。しかし、多くの先生方のプレゼンテーションや多くの施設見学に行くことで、自分の理解が浅かったことがよくわかりました。SWの方々は多くの場所で様々な活動をされていること、またそれに伴いアウトリーチという概念が非常によくわかりました。

こうしたことから精神科医としては、PSWの方が行われている業務について一層理解が深められたと感じております。また、産業医としても自分が今回のセミナーから得、直接業務に結び付けられることが非常に多かったと思っております。

セミナーは3週間の共同生活ですので、参加者同士が揉める事もあるかと思いましたが、そのようなこともなく、お互い切磋琢磨しながら全員で気持ちよく過ごすことができました。皆さん大人で、それでいて子供のような好奇心も持っている人ばかりで、刺激しあう存在だったと思います。

今回の参加者は、極めて明確な目標を持った人から、まだ目標を決めかねている人まで様々でした。面白かったのはセミナー終盤での講義の中で、「このセミナーに参加して考えがどのように変わったか」と講師から質問があった時のことでした。極めて明確な目標を持った人であるにもかかわらず、その考えが大きくぐらついたり、決めかねていた人が1つ大きな目標を見つけたり。こんな経緯を見ながら非常に興味深く感じておりました。

参加者に大きな影響を与えてくれた「ハワイ・ソーシャルワーク・セミナー」でした。



カリヒ・パラマ・ヘルスセンターを見学

【第9回ハワイ・ソーシャルワーク・セミナー 概要】

日 程：2012年2月13日～3月4日
会 場：ハワイ大学マノア校、宿泊ホテル会議室ほか
対 象：ソーシャルワーカーをめざす大学院生・大学生
参加費：15万円
主 催：公益財団法人ユニバーサル財団
共 催：ハワイ大学 MBT ソーシャルワーク学部
ナ・レイ・アロハ財団
後 援：一般社団法人日本社会福祉学会
一般社団法人日本ケアマネジメント学会
社団法人日本社会福祉教育学校連盟
社団法人日本社会福祉士会
社団法人日本社会福祉士養成校協会
特定非営利活動法人日本ソーシャルワーカー協会
日本地域福祉学会

研究助成

基本テーマ：豊かで活力ある長寿社会の構築をめざして

2011年 助成採択者一覧

① 長寿社会における社会保障制度・政策、経済

『社会保障制度と震災等被災者支援制度との関連・接続に関する歴史的検討ー包括的な社会保障制度構築に向けて』

神奈川県立保健福祉大学講師
岩永 理恵

『イングランドにおける高齢者用部分的所有 (Shared Ownership for the Elderly) 住宅の利用者実態調査ー高齢者用公的賃貸住宅との比較を中心に』

Cambridge Center for Housing and Planning, Department of Land Economy, University of Cambridge Research Associate
宇田川 千尋

『利用者を理解した建築専門家育成のための仕組みづくりに関する実践的研究ー日本と韓国を対象としてー』

兵庫県立福祉のまちづくり研究所研究員
趙 玫姫

『保健・福祉サービス利用が困難な高齢者の継続支援に関する看護実践の解明とその構造化』

首都大学東京大学院人間健康科学研究科博士後期課程
神崎 由紀

『長寿社会を支える若者の進路保障の研究ー脱家族主義をスウェーデンの教育政策に探る』

中京大学現代社会学部准教授
大岡 頼光

② 高齢者の心・健康・生活

『日常生活における暑熱障害危険因子の検討』

岡山県立大学助教
島崎 康弘

『大規模無作為集団 15 年追跡による QOL 高く生き抜くための心と健康の包括的アウトカムの開発』

近畿大学医学部公衆衛生学教室准教授
玉置 淳子

『高齢者の幻視の発現機序と脳内基盤の解明のための研究』

大阪大学大学院医学系研究科精神医学分野講師
數井 裕光

『男性介護者のストレス対処能力 Sense of Coherence(SOC) を高める要因の探索と支援の方略に関する研究ーパートナーシップを基盤とした Community-Based Participatory Research(CBPR) を通してー』

石川県立看護大学在宅看護学講座講師
彦 聖美

『特別養護老人ホーム施設職員における家族支援の実態ーパス解析による構造化の試み』

広島国際大学看護学部講師
木村 誠子

『変形性膝関節症に対する下腿内旋エクササイズが膝運動機能および膝キネマティクスに及ぼす影響』

広島国際大学保健医療学部准教授
蒲田 和芳

『日本と韓国における認知症高齢者と家族へのケアモデル構築に関する研究ー二者関係の親密性の変容に焦点を当ててー』

立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科博士課程 3 年
任 賢宰

③ 豊かな長寿社会の実現

『地方都市における高齢世代の外出行動とサステナブルな移動支援に関する実証的研究』

東北学院大学経済学部共生社会経済学科専任講師
齊藤 康則

『仮設住宅で暮らす高齢者のコミュニティ形成とコミュニティケアに関する実証的調査研究』

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程
富安 亮輔

『地域で行うラジオ体操活動がもたらす高齢者への多面的効果について』

星城大学リハビリテーション学部助手
今井 あい子

『高齢者施設における入浴介助者の脱水症に関する検討』

神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部栄養学科教授
谷口 英喜

『介護領域における危険予知トレーニング (KYT) テキストの開発研究』

日本社会事業大学准教授
佐々木 由恵

2010 年助成報告



永野 仁美
上智大学法学部 准教授

介護・福祉サービス利用費の保障（補償）方法 及び財源確保に関する研究（日仏比較）

本研究は、高齢者及び障害者の介護・福祉サービスの利用にかかる費用に関し、その財源調達の仕組みと当該費用を保障する給付について、フランスの法制度を調査・研究したものである。2004年に新しく設立された全国自立連帯金庫（CNSA）、高齢者の介護費用を保障する個別自立手当（APA）、及び障害者の福祉サービス費用を保障する障害補償給付（PCH）について、詳細に紹介したうえで、日本の法制度に対する示唆を得ることを試みている。

フランスでは、高齢者及び障害者の自立のための

給付に必要な財源を同一の仕組みの中で調達しつつ、その給付（APA及びPCH）の内容には、非常に多様な差異を設けることが行われている。すなわち、申請手続きやニーズをはかる仕組み、最終的な支給額の決定方法（上限の設定、自己負担）等において、2つの給付の間には大きな相違が存在する。

このようなフランスにおける例は、日本における高齢者及び障害者への介護・福祉サービス費用の保障に関して在り得る選択肢の1つを提供するものである。

2010 年助成報告



石塚 裕子
大阪大学大学院工学研究科
地球総合工学専攻 博士後期課程

高齢者等の移動制約者を対象とした 「まち歩き型」観光の効果分析と観光地整備の方法

— 視覚障がい者の観光まち歩きの効果分析を通じて —

本研究は、近年、研究が盛んになっている観光バリアフリー研究のレビューを行い、研究対象の分類ならびに課題について分析を行った。特に研究が不足している視覚障がい者を対象に、移動制約を感じることが理由となってニーズが潜在化している「まち歩き型」観光の支援方法について考察を行った。

本研究では、視覚障がい者の移動能力の発達に影響を与えている要因に着目し、移動経験に関するライフヒストリー調査から「まち歩き型」観光の支援では、『周囲の人々を利用して自身の能力で行動できる経験』の重要性を明らかにした。そして、「まち歩き型」観光の一つである観光ガイドを伴った散

策について、「触る」という要素を取り入れた場合の効果について実証研究を行い、POMS短縮版質問紙を用いて、その効果を計測した。その結果、まち歩きは気分を改善する効果が高く、「触る」要素を取り入れることで、さらに効果が高まることが明らかになった。また、「触る」まち歩きを行うことで、当該地区に対する評価、まち歩きに対する満足度も向上した。さらに、「触る」まち歩きを経験することにより、まち歩きに対する自己効力感を高める可能性が確認でき、これらの結果から、自身の五感を用いて能動的に体験することの有用性と必要性を明らかにすることができた。

特定活動助成「東日本大震災支援プログラム」

こころのケアのための“傾聴ボランティア”を 応援します

ユニバーサル財団では、1995年に発生した阪神・淡路大震災を機に、主に仮設住宅に住む独居高齢者を精神面から支える目的で「ユニバーサルボランティア」を結成。現在も復興住宅で友愛訪問を継続しています。ついで2000年の三宅島噴火災害、2004年の新潟県中越地震でも組織を立ち上げて、こころのケアの一助になる活動を目指してまいりました。東日本大震災では被害が広範囲にわたることから、高齢者の話に耳を傾け自立を見守る多くのボランティアを要します。2012年度は、ユニバーサルボランティアと同様に「こころのケアのための傾聴ボランティア」として活動している団体を支援します。

- 対象／特に次の項目に該当する団体を助成対象とします。
 - ①被災地でこころのケアのための傾聴ボランティアとして活動をしている団体
 - ②被災地から県外に避難を余儀なくされた方々を対象に、こころのケアのための傾聴ボランティアとして活動をしている団体
 - ③上記の団体のうち次の条件を満たした団体
 - i) 応募に際して、地元社会福祉協議会の推薦を得ること
 - ii) 団体として、既に一年以上の活動実績があること
- 助成期間および金額／最長3年間。原則として年50万円を上限としますが、助成額については活動内容および規模により査定をさせていただきます。継続助成につきましては、経過報告を重視して決定いたします。
- 助成金の使途／活動に直接要する諸経費。(既に終了した活動については含みません。)

- 選考方法／当財団の選考委員会及び理事会により決定させていただきます。
- 応募方法／当財団所定の申請書に必要事項を記入の上、当財団宛ご送付ください。(紛失等のトラブルを避けるため、なるべく書留や宅配便でお送りください。) なお、ご提出いただいた申請書はご返却いたしかねます。申請書は当財団HPからダウンロードしてご利用いただくこともできます。 <http://www.univers.or.jp/>
- 応募締切日／平成24年7月31日(午後5時必着)
- 助成にあたって／助成が決定した活動・団体につきましては公表いたします。助成年度終了後に報告書を提出していただきます。
- 発表／平成24年11月1日予定
- 助成金振込／平成24年11月下旬予定

お知らせ

当財団は、内閣総理大臣より公益認定を受け、2012年4月1日付で「公益財団法人ユニバーサル財団」として新たにスタートいたしました。事業目的に、「高齢化問題をグローバルな視点から捉え、助成、人材の育成、国際交流等の事業を行うことにより、少子高齢社会及び人口減少社会における社会福祉の増進に寄与すること」と定めさせていただきました。引き続き、ご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

公益財団法人ユニバーサル財団

〒160-0004 東京都新宿区四谷2-14-8 YPCビル
Tel.03-3350-9002 Fax.03-3350-9008
E-mail:info@univers.or.jp <http://www.univers.or.jp/>

ユニバーサルボランティア神戸事務所
ユニバーサルボランティア東京事務所

〒651-0056 兵庫県神戸市中央区熊内町5-8-19 (Tel.078-221-5901)
〒190-0012 東京都立川市曙町2-8-29 村野ビル (Tel.042-540-1361)